資本の計理學的觀念

二、資本の本質一、財産と資本

三、資本の大き二、資本の本質

經濟學及商業學に於て說明せられる資本の意義には明かに異れる二ケの觀念があつて、財産の意に解せられる 財 產 と 資 本 z

として多くの人々に依て說かれる主要なる諸點は ひである。資本は或種の財貨に限られて他の財貨は資本にあらずとする考へより是を分類するに當て、その標準 ところである。而してその説明の岐るゝ要點は凡ての經濟的財貨を以て資本とするや又はその一部なりとするや 說くところ區々として一致せず且つその何れの說明を以てしてもその眞意を完全に捕捉し難きことは何人も知る の點及その財貨の內資本に屬すべきものと、屬せざるものとを區別する場合に於けるその分類の標準に關する爭 (1)財貨そのものの性質 ②財貨の使用せられる狀態 (3)財貨

通常であつて、資本とは生産用具財と同意義なりとせられた。財産としての資本の意義に就ては、從來各學者の 場合と、抽象的價値の意に解せられる場合とがある。近時に至る迄最多くの場合前者の意味に說明せられることが

資本は生産物なること

所有者の精神等であると思ふ。Senior, Böhm-Bawerk. 及Mculloch 等の意見に 從へば、

献をなすべきものと考へて差支ない、 明かであるけれども、 本を並立せしむるための考へ方であるが、土地が他の財貨と異て或特種の性質を具へ、特殊の貢献をなすことは 土地、天然力及勞働等は資本の内に加ふることを得ざるものとする。斯る説は生産要素として土地及資 これを企業活動の點より見れば、 又一般用語例について見ても土地を資本より除外することは餘りに人爲的 土地と他の財貨とは原則上同一の性質を具へ、 同種の貢

があると思ふ。即ち食料品と食器類及衣服類等とを根本的相違ある經濟學上の用語に依て分つことは隱當でない。 ものであつて、これを以て根本的に異る二種の觀念を分つべき標準となすことは理論上餘りに人爲的なるの缺點 れば資本たらずとして同種の見解を持する如くである。然し恒久的及非恒久的の差は單に程度の相違に過ぎさる 燃料等は資本たることを得ざるものとなし、Walras 及 Pareto 氏等も亦一回以上の使用に堪ゆるものにあらざ

なるの觀がある。次に Hermann 氏は恒久的性質を有する財貨のみが資本と稱すべきもので あつて、

食料品及

の如く勞働者壓迫、 勞働所得搾取等の手段として活動する財貨が資本であつて、常に斯る迫害を勞働者の 場合に限てこれを資本と呼び、斯る貢献をなさゞるものは凡て資本にあらずと論する場合と、これと正反對に、

②の標準に依て分つ人々は勞働者維持又は生産幇助、或は生産用具等の特殊なる貢献を財貨が生出せしめたる

の說は一種特殊なる理論の上に立つものであるが、他の說即ち生産機能又は收益機能を資本の資格として考慮す 上に加ふることが資本の特性であり、これを加ふることなき財貨は資本にあらずと説く場合とがある。

益を與へて居らぬものは古々は資本と考へては居らぬであらうか。これ等の疑ひを有て見ればこの標準も亦曖昧 意味するであらうか、資本として吾々が考ふるものは果して常に特殊の收益を與へて居るであらうか、 であるといふことは自明のこととして肯定せられる。然し更に深く考察を進むれば收益を與ふるとは果して何を 極めて適當なる解釋であつて、資本は常に收益を生むためにのみ投ぜられ且つこれを實現するものが初めて資本 實際上收

ることは非常に多數の人々に依て保持せられ、アダム・スミス以來常に邀奉者が多い。常識的に考へればそれは

るものとすることは果して正當であらうか。 の用途にこれを使用せんとする場合が多い。乍然個人の意思のみに因て或財貨の經濟學的性質が全然左右せらる 資本を投するとか、資本を回收するとかいふときは吾々の精神に於て特に或財貨に對して特殊の氣持を有て特定 あつて、心理的解釋を以て經濟現象の說明をなさんとする場合には最も正しき說明の如くに見ゆる。又通常吾々が 如何なる客觀的作用をなすべきかといふ點にのみ着眼すべきであつて、一個人の意思を以てその決定要件となす 財貨といひ、資本といふ經濟學上の觀念は、 それが經 濟活動 に於て

次に③の標準即ち財貨所有主の精神よりこれを分つことは J. S.

Mill

に依つて初めて主張せら

n

たるもので

見れば寧ろ非個人的年實であるといはなければならない。故にそれを所有す る 個人 の精神如何に拘らず或種の 言ふまでもないことであるけれども經濟現象そのものは個人の意思のみで動く事實にあらずして、その本質より ことは當を得ない。勿論資本又は財貨が經濟現象内に現はるゝに當て人間の意思が主要なる役目を有することは

財貨は資本としての活動をなすものであり、且つそれが何人の所有に屬するやを問はず全種の活動をなすものと

.

するも明確なる區分を資本及非資本の間に設ぐることは不可能である。 以上述べたるところに依て種々なる分類をなすことは時に依ては甚だ有用であるけれども、何れの標準を以て

資本とは一瞬時に存在する財貨の有高であつて、所得とは或期間を通じて財貨が與ふる貢献の流出であると主張 故に Irving Fisher は斯る區別を全然設けず、總ての財貨は資本であると言ひ、資本及び所得の定義として、

の儘あてはめて、一瞬時に於て、その企業が所有する財産が凡て資本財なりと稱して大過ない。 して居る。(Fisher-Nature of Capital and Income)而してフィツシャーに依る資本の定義を企業經營論にそ

前述の如く資本を以て財産なりとする觀念に對して第二の觀念即ち資本は抽象的價値なりとする觀念がある。

この兩者の區別に就ては J. B. Clark に依て最も明瞭に主張せられたることは何人も知るところであつて、クラ

Goods は變轉極りなく、一瞬時も同一形態にあることなしといふことを得るけれども、Capital Value は不動 1クに依れば資本の觀念について Capital 或は Capital Value と Capital Goods との二種を認め Capital

するために破壊せられ、變形せられるものである。卽ち資本價値は永續性を特徴とするに反して資本財は壞滅性 的且つ恒久的である。 元來 Capital は永久性を以てその特徴とす るに反し。Capital Goods は Capital が永續

を以てその特徴となし、又資本價値は完全なる移動性を有するけれども資本財は然らざるものである。卽ちクラ

は彼の所有する生産的財貨の總額を現はすのである。即ち彼は不知不識の間に抽象的觀念なる貨幣の額に依てと 見るに、 的資本がこれを通過したる後常に残留するところの一定の價値である。而して資本なる用語の一般用法について クの言葉を借りて言へば價値資本は具體的資本が通過する通路であつて、種々なる形に於て變轉出入する具體 商人に對して資本を尋ねれば金十五萬圓叉は金五十萬圓等といふ如く答へることが通常であつて、 こ れ

١

れを考へるのであつて、資本とは常に轉々する具體的事物に投下せられたる生産財の額となすのである。

貨の生産力は具體的事物であり乍ら貨幣に依て抽象的形式として表示せらる。前に說きたる如く資本を以て生産 具體的事物が抽象的形式の意味に依つて表示せられることは屢ば見られるところである。資本の場合に於ても財 生命そのものは抽象的觀念であるけれども人間の縱續的存在としてはそれは具體的の事實であると同樣であつて、 このことは恰も水力なる觀念が通常抽象的意義に用ひられつゝ、實は具體的事物であることと同様であり、**又**

用具即ち機械、器具及原料等のみと考ふるとすれば理論上種々なる困難を生することを発れ難いのであつて例へ

年五歩の利子を收益するものは建物にあらずして建物に投下されたる貨幣のみが收益することを得るので

收益するところのものが利子で あり、具體的用具なる建物が收益するところのものが家賃である。 故に
斯る
説明を
完全
になす
ため
には、
こゝに
述べたる
二ケの
觀念を
必要とし、 抽象的意義に於ける資本が ば、

B.) Distribution of Wealth) 斯る二ケの觀念はクラーク以外多くの人々に依ても異れる言葉を以て說明せら

れ Gide は Capitaux Iucratifs 及 Capitaux Productifs の名に依てこれを使ひ分けて居る。

資本の計理學的觀念

る資本と、生産用具の觀念より見たる資本とを論する必要がある。而してこの(1)を論するがためには抽象的觀念 生産組織又は企業組織の觀察をなすに當ては 要するにこの兩種の観念は資本の全面を理解するについて何れも必要なるものであつて現時經濟生活に於ける ①投資關係及②生產過程の兩面より考察して投資の觀念より見た

に依る資本を必要とし、 計理學に於て資本の考察をなすに當てょ亦との雨面の觀察が、その全體を理解するについて必要であり、 (2)を論ずるに當ては具體的觀念に依る資本を必要とする。

この

産的過程に注目すること尠くして投資收益の方面に専ら集中せられるに至れることが近世株式會社企業の特徴で あることは の評價は結局この①の見方より生産用具財の評價がなされるものといふことを得べく、企業經營の事實がその生 兩者の相關的關係を表示する一方式が貸借對照表であるとも解釋せられる。又營業價值或は經營價値に依る資產 Veblen が Theory of business enterprise の中に説ける如くである。 故に財産は Nick lisch のいふ

ickliseh-Wirtschaftliche Betriebeslehre P.57) 生産活動の一面が財産の運動に依て成立するもの なることは明 が經營せられるところの金融的手段であつて、財産に同一物の他而を表はすものであると解して好いと思ふ。(N-如く一經營形態中に結合せられたる經濟的財貨であつて、貸借對照表の積極側に示されるものであり、資本は企業

及機械等に依ても企業經營は完全に行はれ得るのであつて、これより見れば企業活動は財産のサービセス より成り、各種財産のサービセスの有機的運動を統括指導する活動が企業經營であるといふことを得る。而して の運動

との運動する財産は必ずしも一の企業に所有せられる必要はない。

借入られたる土地、

建物

かであるけれども、

織 との 他の財産の如くそのサービセスと財産とを分離することを得ざる特性を有て居る。この點は他の財産と全く異る 所有することもあるべく又或場合にはこれ等のものを借用するに止ることもある。 むるのである。 ところであつて、 これ等財産 根本問題には勿論觸るゝことがない。されば企業財産とは企業に關與する總ての財産といふ意味にあらずして、 せぬ譯である。故に計理學上の理論は常に現在社會制度の下に於てのみ適合せられるのであつて制度そのものの なりといふ譯ではない。 經營に必要なる財産はこの運動を保證するに必要なる財産であつて、この企業の生産過程に關與する總ての財産 の所有に屬せしむべき必要を有せず、たゞそのサービセスを十分に活用することを得れば足りるのである。 る財産を利用財産と稱することを得る。 三にサ の如きものはそのサ の下に於ける秩序に因るのであつて、 サービセスの運動がなされるについては、第一に經營者たる人間、 1 ど Ø +}-スが利用せらるべき財産等の三要素を必要とする。この第二要素たる財産を設備財産、 ービセ 斯る法制なしとすれば財産の所有者は存在せず從てそのサービセスの貸與といふ如き關係は發生 普通 ービセスのみ借受くるが如きことは不可能であつて、その所有權は當然借用者に移轉し、 スの運動を保證するに必要なる財産の謂である。 一般の商品及原料品等についても同様である。たゞ手敷料を儲けるための賣買をなす場合 何故に斯くの如く財産とそのサービセスとの分割が生じたりやといふことは現在社 財産とそのサービセスとを分ちて所有し得べき現時の法律制度が然らし 經營はサービセスの運動を指導するものなるが故に必ずしも財産を自己 從て或場合には土地、 第二にサービセスを引出すべき財産、 たゞ第三の要素たる財産即現 建物及 機 械 等

會組

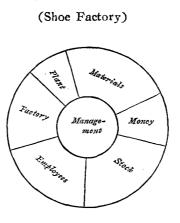
資本の計理學的觀念

には商品についてもその所有權移轉を必要とせざることがあつて、この場合には商品は或意味に於て恰も第二要

素たる財産の如き關係に立つものといふことを得る。

Hobson に依れば企業經營の實際上の獨立が個々の營業を形成するのであつて、企業經營の實際狀態を圖解す

れば次の如くなる。



(Mercantile business)

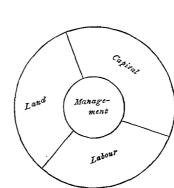
Money Manageeto Stock Employees

ひられ又は製品の賣上に依て受取られるとき流動資本ともいふことを得るけれど又他方より見て、それは金融機 動單位を business と呼ぶ。 而して社會の生存に必要なるものを供給するところの生産活動が實業世界であつて、これ等の過程に於ける活 貨幣及信用は營業に於ては特殊の役目を果すものであつて、 それが原料の仕入に用

能の fixed body とも考へられる。而して資本とは非人的要素の内土地を除きたる總てのものを指すのであつて、

建物、機械、道具、燃料、動力、原料、貯藏品及貨幣等を含む。これを圖解すれば次の如くなる。(J. A. Hobson)

The Inudstrial System p.2 p.9)



故にホブソンは財産を以て資本となすのである。

penditure)との區別がある。この分類は或支出がなされたるとき、それが果して財産取得のための支出なりや、 計理學に於ける最も重要なる問題の一として資本的支出 (Capital Expenditure) と損益的支出 (Revenue Ex-

叉財産評價及收益計算上の誤膠が導かるゝものとなされる。從て斯くの如く重大なる分類は何を標準にして行は 又は經費支拂のための支出なりやに關するものであつて、これを混同誤解することに因て計算上の正確は失はれ

るべきかは最も明瞭になされなくてはならぬ點であつて、多くの學者に依て種々に說明せられたるに拘らず何れ **資本の計理學的觀念** 六二三

\$

unting)勿論損益的支出と雖も收益力增大の効果を與ふことを常とするけれども、 考へて大過なき標準はディクシーの説くが如く、收益力を以てすること即ち永續的に收益力增進の原因となるべ て一時的なるものである。 き支出は資本的支出であつて、然らざるものが損益的支出なりとする説である。(L. R. Dicksec-Advanced Acco 明確なる分類をなし得ざることが多く且多數の人々の說くところ必ずしも一致せない。 機械を新に買入たるためその收益力を増大することが常態である如くに又消耗品を買 その効果が繼續的にあらずし 然し計理學上

事の性質上明瞭なる限界がない。その收益力の增進がその營業期間内に全部完了するが如き極めて短期のもの例 は單に時間の問題である。故にこの標準を採るとすれば兩支出を分つべき時間單位を必要とするけれどもそれは 力の増進をなす効果あるに反して、消耗品はその効果が極めて短期間であるといふ點であつてその異る唯一の點

紙、印紙、

入たるため何等か收益力に貢献することが通常であるが、異るところは機械の如きものは非常に長期に亘て收

大することもあり又せぬこともある。 誤ることは尠い。最も困難なる問題は修繕費の如き支出について生ずるのであつて、それは時に收益力を特に增 叉收益力を增大したる場合に於てもその影響が極めて短期間に終了するこ

及給料等の如きものについては、これを純然たる損益的支出とすることに何人も異論なく且つ

これ等の支出に對しては個々の場合について精密に觀察をなし且つ判斷する外途なきものであつ

一概に論ずることを得ない。理論上は次の營業期に繼續せらるべき收益力の增進はこれを資本的支出として

差支へなき譯であるけれども實際上は手數の省略と經營の健全を期する等のために僅かに二營業期間に亙るもの

産と同一標準に依てその意義を決定し得ざることは當然であつて、ディクシー氏の標準もその儘直ちに充てはま は固定的にあらずして回轉的であることがその本質であるからである。さればこれ等回轉的の利用財産は設備財 難き場合が多い。 故に前記ディクシー氏の標準は設備財産については最も好く適合するに反して利用財産については明確に適合し ための財産にはあらずともいふことを得る。けれどもそれが財産として収扱はるゝに就ては何人にも異論なきが 及商品は轉々して留ることなく、常に移動しつ」あるが故に嚴格に解釋すれば、 も亦尠くない。例は現金及商品の如きものは果して繼續的收益力增進をなすべき財産といふことを得樣 くの如く緩續的收益力增進を標準とする考へは大多數の場合適切であるけれども、その儘これを適用し難き場合 化すべき道理であつて、機械及家屋等の減價の如きはこの理由に依て損益的支出に屬すべきこと明かである。 ない。斯くの如くしてなされたる資本的支出もそれに依る收益力の減少に應じてその減少部分宛損益的支出に變 長期に亘る収益力の增進をなすための支出のみが資本的支出として取扱はるべきものなりといふ外説明の仕方が るべきものを資本的支出として可なるべきやは人の考へに依り、見込に依り又ものに依て自ら異り、 ビセスをそれより引出すべき財産にあらずして、それ等サービセスを利用せしむる材料であるから永續的、 これは前に說きたる如く、貨幣及商品等は企業のために特殊なる作用をなすものであつて、 現金は永續的收益力増大をなす 現金

斯

→}-

叉

についてはその金額の大ならざるときはこれを全部損益的支出と看做すことを常とする。果して幾營業年度に耳

ることを得ない。然しこの利用財産については資本的支出と損益的支出との分類をなすに當て困難を生ずること

資本の計理學的觀念

ì

商學研究 第三卷

第二號

き物はこれを所得として資本とせない。卽ちこれ等のものは他のものと異て、時の延長に亘て繼續的に貢献を與 質上その使用の目的のために唯だ一回のみ貢献を與ふるもの、卽ち一回の貢献をその全生命として消滅するが如 との分類に闘する標準卽ち一回以上の使用に堪ゆるや否やといふ標準と料類似したる點がある。 めて重用なるものといふべきである。この收益力增進の機續期間に依る分類は恰も Léon Walras の資本と所得 を生する恐れある設備財産に關してはこの標準が極めて適切に利用せられるから前述の如き困難はあつても猶極 は常にこれを財産と考へ、資本的支出として整理せられるのに少しも差支へがない。この分類について最も困難 極めて少く、 その出入も亦非常に明瞭であり且つその現在高も常に監視計算せられるから、 その現在高について ワルラは物の性

するところは上に說きたる計理學上の理論と全然同一なりとはいひ得ない。計理學に於て繼續的貢献と稱するの は嚴密なる言葉を以ていへば、その營業年度内にその貢献を完了し盡すものにあらずといふ意味であつて必ずし 做して、これを所得なりと斷定する。物の與ふる貢献が繼續的にあらずして一時的であるから、 き收益力の增進も亦一時的であつて計理學に於て損益的支出とする考へと同樣に見ゆるけれども、 ふることなき性質のものであつて、一回の貢献の結晶に過ぎないから、貢献卽ち所得そのものと同一物なりと看 これより生ずべ ワルラの意味

品及燃料等についての支出は、これを資本的支出となさないけれども、これを損益的支出と考慮するについては、

をするについて、その貢献を與ふる時間の延長を考慮する點に於ては相等しい。故にワルラの考へと同樣に原料

も唯だ一回の貢献のみとは限らない。故に一時的及繼續的といふ意味については同一ではないけれども、

此區別

失すべきものなりといふのではない。永久的の見地よりすれば、これ等のものは必ずや一回の使用に依て消失す

それ等のものがその營業年度内に消失することを豫想しての觀念であつて、その物の性質上必ずその年度内に消

二 資本の本質

資本の觀念に財産よりするものと、抽象的價値よりするものとの二種あつて、兩者何れも有用なることは前節

に述べたところである。

理學上の資本觀念とするならば、資本は抽象的觀念であつて、具體的觀念なる財産と對立するものといふことを 計理學に於ける資本金勘定は抽象的觀念にして貸借對照表右方に現はるゝ勘定であるから、若しこれを以て計

依る資本を説明するとすれば、計理學にては所謂貸借對照表方程式を基礎としてこれをなすことが最も便利であ る抽象的意義に解せられることあるは何人も知る如くである。今財産と資本とを相對立せしめて、抽象的觀念に 通説に從へば計理學上資本は斯る抽象的觀念に依る資本を指すものとせられ、經濟學上の資本觀念も同樣に斯

る

Schär のいふ如く、簿配の主たる目的はこの Reinvermögen とその增減を計算することであると説かれること が通常である。而して Reinvermögen の見地より見れば Fremdkapital は Negative Grösse であつて負の符 簿記の原理を説明するに當て、常に最も重要視せられるところのものは Reinvermögen の觀念であつて、

號を以て表はされ、方程式の左方に負債として示される。

配约 Reinvermögen=A-P=Eigenkapital=K

なる方程式が複式簿記の根底とせられる。(Schär-Buchhaltung und Bilanz 4te Aufl. 1921 p. 145)

これを更に書直せば、

積極財產一消極財產一資本

となり、これは、財産を積極と消極とに分ち、その差引残高を以て資本とする考へ方であつて、資本とは此残

又は 積極財産=滑極財産+資本

なく、示さるべき 或物が當然含まれて居るのであつて、 この大きさが 計量せられる本體が 何であるかといふ或 て、單なる計算上の大きさの意味に解することも尠くないけれども、その大きさは單に漠然と大小を示す譯では 高を示すところの計算上の大きさに過ぎないものとせられる。普通一般に資本とい ふと き、 抽象的意味に考へ

ロ長所があるけれども、餘りに形式に又は外面に囚はれたる缺點はないであらうか。計理學の目的を以て單なる

少しも資本なる觀念の內容を示さず、所謂二種の財産の balance である。斯る資本の說明は極めて簡單明瞭な

内容が常にそれに 附隨して居る。 然るに上に掲げたる公式に基く 資本観念は、 單なる殘高又は差額といふ外、

接關係を保たしめ、且つ經濟現象の內容と結付けて考へれば、右の如き說明は餘りに簡單に過 ぐる 樣 に思はれ 瞭なる長所ありといふことが出來る。けれども計理學の性質を猶一層深く考察して、今少し吾々の經濟生活に直 balance の合致を研究することを主眼とする計算機の作用の如くに考へるならば、斯る說明は最も便利にして明

資本の計理學的觀念

る。Schär も亦その Kapitalgleichung A-P-K とは別じ、Bilanzzleichung A-P+K なる公式を掲げて、

積極側に列記し、他方消極側に Fremdkapital と Eigenkapital とを分離記載せるものが Bilanz であつて企業 上より見て重要なる他の方程式を必要とせないであらうか。Schär に依れば私的企業に歸屬する各種財産を一方 Bilanzの説明については新なる方程式を以てせる如く、上述の簿記原理説明のための方程式の外に、企業經營

考へた様であるが、計理學を以て吾々の經濟生活に直接關係ある企業活動の說明をその對象とすべきものと解す これに依て見れば Schär は簿記原理の説明と貸借對照表理論とを異れる二種の方程式を以て説くべきものと

Ibid. p. 39 p. 127)

は凡て Geldkapital 又は他の

Sachgüter を利益獲得の目的を以て回轉せしむる技術なりと言て居る。(Schär-

isch の言へるが如く Schär のBilanzgleichung は單り Bilanz に關してのみならず、凡て計理學上の理論全體 を通じて適切なるものであつて、簿記原理の根底としても亦最も適當なるものと考へる。(Nicklisch-Wirtschaft るならば前記 Bilanzgleichung が總ての場合に適合すべきものの如く思はれる。故にこの點については Nickly

唱ち 財産=資本 及 財產=他人資本+自己資本 liche Betriebeslehre 3 te. Aufl. p. 67)

れは經濟學上の用語法よりいふも當然のことと思はれる。財産といふ時それは通常積極にのみ限 られ、(數學上 とすることに依て財産を積極と消極とに分つことを止め、 財産は凡て積極に限らるべきもとするのであつて、こ

ろ全く一致せざることは前節に述べた通りであるけれども、何れの説に依るにしても負債を以て資本財の消極部 は資本財を意味するものであつて、資本財とは如何なるものなりやといふ點については決して各學者の說くとこ 計算の便宜よりいふ時は別として)消極の財産といふことは財産の本質上極めて變則の名稱である。通常財産と

分なりとすることは殆んどない。

形に於て企業の經營行爲に關與するかといへば、結局同じく土地、建物及商品等の形に於てするのであつて負債 き事物であつて、土地、建物、機械及商品等を意味するのである。然るに消極財産と稱せらるゝものは如何なる 財産について如何なる説明がなされるにしてもそれは企業の立場より見れば經營行爲の設備及材料等となるべ

くの如く解するとすれば、賃借對照表の借方側は企業が所有する資本財を表はし貸方側は企業の資本價値を表は 建物等の形となつて活躍せることと全く同一である。從て消極財産なる言葉は學問上及通俗用法上變則の觀念で あつて、 る譯である。故にこの點に於ては恰度自己資本が代表するところの價値が旣にその企業の財產として一方に土地 に依て代表せられる價値に相當するところの財産は旣に、 それは企業本位より見れば寧しろ財産勘定よりは資本勘定に近きものと解することが適切であらう。 土地、建物其他の形に於てその企業經營行爲に關與せ

斯

積極一消極十資本 又は 積極一消極二資本: すものといつて好い。通説に從て、資本説明の方程式として

を採るとすれば、積極と消極とは同性質のものであつて、資本は單にその差額たる計算上の大きさを示すに過ぎ

資本の計理學的概念

然るに積極と消極との關係は實際に於て同性質のものにあらずして、積極財産の一部のものの價値が消極

消極財産は資本價値であつて、兩者その性質を異にし、無條件にその差引をなすことは許されざる筈である。理 幾何といふことを所謂消極財産が表示する役目を有つのである。故に積極財産は常に資本財であるに反して所謂 財産と稱せらるゝ勘定に依て表示せられるといふ點にある。卽ち企業全體の資本價値の內他人資本に屬するもの

論的に言へば右の方程式は左の如く分解することを得る。

總積極財產一他人分積極財產一純財產

及 自己分財產+他人分財產=自己資本+他人資本

はニックリッシュも同様に非難して居る。(Nicklisch—Ibid. p. 66) この公式に依て明かなる如く積極財産より直接に消極財産を差引くといふ觀念は理論上正當でない。このこと

今貸借對照表の兩側を財産と資本とに分ち、一を資本財、他を資本價値と解するとすれば、クラー ク の

いふ

Capital Goods と Capital Value の觀念がその儘とゝに適用せられるのであつて、この Capital Value を資

本は抽象的價値に依て終始殘留する。卽ち資本價値の側より言へば貨幣に依て現はされたるその企業の値打は常 に存在する譯であつて、この企業の資本的價値が資本である。故に斯る抽象的意義に於ける資本は企業價値と**同** 本と觀念すれば財産は經營行爲の進行に連れて回轉變化極まりなく.一瞬時も同一形態に存することなきも、資

ち通常所得或は收益と關聯してその源泉たる財貨、又は所得の還元せられたる價值等が附隨して考へられる。 はすものにあらずして、それが資本と呼ばるゝ以上は何等か特殊の内容を附隨して考慮せられるものである。卽 一義であつて、それが抽象的大きさに依て表示せられることは明かであるけれども、無意味に計算的大きさを表

以上說明したる如く貸借對照表左方を財産右方を資本として考慮する理論に對する有力なる反對として、債權

財産はその企業の所有する財産として貸借對照表左方に或形態に於て表示せられ居るが故に、これに相當する財 の性質を異にするものであつて法律上の請求権を示して居る。經營手段としてはこの法律上の請求権が作用する 權は貸借對照表の左方に現はれて、財産を示して居るけれども、悉しく吟味すれば、他の一般財産とは少しくそ 事物を指すのであるが、斯る經營材料たる事物が消極であるといふことは果して何を意味するのであらうか。債 故に負債のみ抽象的觀念とするやとの疑問である。企業經營上財産といふとき、常に經營手段及材料等の具象的 形、受取勘定等と等しく支拂手形、支拂勘定等の具象的形式に於て企業の經營に關與するものなるに拘らず、何 を以て具象的財産となすに拘らず何故に負債を以て抽象的價値なりとするやとの說が唱へられる。負債は受取手 のであつて、その請求權に相當すべき有形財産は他人に依て所有せられて居るのである。然るに負債に相當する

企業所有財産+他人に對する請求權=他人資本+自己資本、

産は既にその企業の經營手段として存在する譯である。

となるのてあつて、他人資本に相當するものは企業所有財産の內に旣に計算せられ、表示せられてある譯であ

資本の計理學的觀念

る。故に或社會に存在する、有形財の有高を計算するが如き場合にはそれが差引かるべきことは勿論である。 に依て新に附加せられたる企業經營上の力が湧出するのであつて融通力即ち資本であると い ふ が 如き財産であ る債權は貨幣と同様に特殊資本財を形成するものであつて無形資本であり、企業勢力の一形式である。即ちこれ 己の所有に屬せぬ財産に對して或種の權利を有することを示すものであつて、この場合、財産として慮考せられ の企業の總價値の内に旣に計算せられてあるから二重計算の結果を導きはせぬかといふ點である。然し債權は自 値として計算し、その内に他人に對する請求權をも含ましむることとすれば、その權利に相當する有形財産が他 企業の總價値と名づけよう。たゞ斯くの如くすることに依て問題となるのは、若しもこれ等總てをその企業の價 る。即ち左方の財産は他人資本と自己資本とを合せたる價値に相當する財産を示すのであつて、この合計價値を 有形財に限て資本なりとする Irving Fisher の例に依れば、

Person X

| | Railroad shares | Residence | Z's Note | Assets |
|------------|-----------------|------------------|-------------------|-------------|
| \$120,000 | 20,000 | 70,000 | \$ 30,000 A | |
| | | (Capital balance | Mortgage held byY | Liabilities |
| \$ 120,000 | | 70,000) | \$ 50,000 b | 50 |

これ等の勘定の中で一度現はれた項目即う一度 Liabilities として現はれたるものが他人の Assets として現 はれた場合、これに同一符號を附するとすれば、又の Assets に於ける女は2の Liabilities に於ける a に相對 し、この雨者は同額にして且つ反對側に現はれる。斯くの如く相對する反對項目を互に相殺して合計すれば次の

| Y's Debt | \$40,000 C | Debt to X | \$30,000 a |
|----------------|------------|------------------|--------------------|
| Farm | 50,000 | (Capital balance | 80,000) |
| Railroad Bonds | 20,000 | | |
| | \$ 110,000 | | \$ 110,0 00 |
| | | | |

X's Mortgage Personal Effects Railroad Shares

10,000

Assets

\$50,000 B. 20,000

Debt to Z (Capital balance

Liabilities

\$40,000 c 40.000)

\$80,000

\$80,000

Person Y

Person Z

密くなる。

| 借 方 | 側 | 貸力 | 側 |
|--|---|-------------------------------------|--|
| Residence Personal Effects Farm Railroad shares Railroad*Bonds | \$ 70,000 20,000 50.000 30,000 20,000 | X's Capital Y's Capital Z's Capital | \$ 70,000 40,000 <u>80,000</u> \$ 190,000 |

而して更にこれ等三人の資産の内に含まれたる社債祭及株祭等は次の如く分解することを得る。

| | Railro | oad Co. | |
|---------|----------------|--------------------|-----------|
| A | s se ts | Liabilities | • • |
| Railway | \$ 50,000 | Bonds (held by Z) | \$ 20,000 |
| | | Capital Stocks: | |
| | | (held by X) 20,000 | |
| | | (" " Y) 10,000 | 30,000 |
| | \$ 50,000 | | \$ 50,000 |

右の鐵道會社勘定に依て、社債及株券等が代表する財産の內容は明かにせらるべく、これを前記計算に合算す

れば次の如くなる。 Z's Capital X's Capital R.R. Co.'s Capital Y's Capital \$190,000 \$70,000 80,000 40,000 000 対 Farm Railway Personal Effects Residence \$190,000 \$70,000 50,000 50,000 20,000

ture of Capital and Income p. 90-) の無形なる権利の形に於て現はされたる財産は、 結局鐵道なる有形財産として存在する。 (Irving Fisher – Na-卽ち會社の資産は假想人の所有に屬するものなるが故に結局株主及社債權者に歸屬すべく、又株劵及社債劵等

理論は成立し難きこととなる。且又債權を具象的なりとすれば當然債務も亦具象的なりといふ議論よりすれば何 形財産に對する部分的所有であると解さなくてはならぬ。斯くの如く解するとすれば債權も亦完全なる資本財に あらず從て具象的なるものと言ひ得ないから、債權を具象的なりとすれば債務も亦具象的ならざるべからずとの の後に現はるゝ形のもののみが資本財であつて、これ等有形財産に對する無形の權利卽ち債券及株券等は斯る有 有形財産のみを以て資本財なりとすればこの最後に現はれた形卽ちフィツシヤーの所謂 Method of couples

故に資本株券は具象的ではないであらうか。社債券も株券も殆んど同様に具象的であると言ひ得るに拘らず、

方のみ消極財産であつて、他方は單なる差引殘たる計算上の大きさなりといふのは何故であらうか。

前述のフィツシヤーの考への如く資本財は有形財にのみ限るとする説に對する反對說も亦尠からず見られるの

であつて、有形ならざる信用の如きものは資本とはなり得ないか。銀行券、Good-Will 及 Patent 等は如何等

の問題が起る。

ありたりといふことは同一財貨の二重計算であると説かれる。勿論フィツヤシーと雖も Credit に因る生産刺殻 得るといふ點に於ては、信用に依る資本の診明がなされ得るけれども、これに依て Credit と同額の資本增加が の財貨を一時的に支配することを得せしむるに過ぎない。故に財貨を真の所有者よりはよりよく利用することを ツシャーに依れば Credit は財貨の分割所有の特殊なる形式であつて、或人をしてその真に所有する以上

の事賃は認めるのであつて、それに因る間接の資本增加を否定せないけれども、斯る間接的なる資本增加は決し Credit の額と一致するものにあらずと考へ、從つて Credit を以て直ちに資本とすることに反對するのであ

資本的性質より見れば Good-Will, Patent 及 Copyright 等と殆んど同様のものである。(Nicholson—Princimoney(credit money) も credit も同様に生産力の擴大に役立つものであるから、何れも資本であつて、その る。これに反して Nicholson 及 Mcleod 等は Credit を以て明かに資本と認めて居る。ニコルソンに依れば、

ples of Political Economy I. P. 96)

マクラウドは更に詳しく説明をなして曰く、Credit は Personal qualities の一種であつて、この Personal

qualities は次の如き意味に於て資本となる。

- Personal qualities as labour 例ば技師、醫者、辯護士及支配人等の才能、技術等の形に於て資本とな
- り、利益獲得のために用ひられる場合。
- Personal qualities as credit 前記の人々はその熟練、技能及性格等を利益獲得の目的にて用ふるに當

有るものは財貨と稱することを得るが故に信用も亦財貨であつて且つ資本である。 とに依て、貨幣を以てする場合と全く同様の利益を獲得することを得るのであつて、凡て Purchasing power 依るのであつて、この Purchasing power of character が credit と呼ばれる。商人は信用で商品を買入るこ 入、勞働の使用等にこれを用ふることを得る。即ち所謂 Furchasing power of character とも稱すべきものに て、①の場合の如く、貨幣との直接交換に依らずして Promiset to pay in a future time と交換に品物の買

れる rights は當然に資本である。(Mcleod—Theory and practice of Banking vol. I p 75-) のである。この Rights of action は勝手に曹買せられ、その賣買を營むものが銀行業であって、賣買せら (3)Rights of action to demand payment を發生せしむるものであつて、この何れかを商賣上 credit と呼ぶ 右の如く credit が用ひられる場合に於ては、次に當然 rights が生ずる。 即ち Promise to pay は自

信認を與へた人即ち有形的に想像すれば、受取手形の如きものを受取た人が、その credit なる資本を獲得する これ等の説に依れば credit は資本であると考へられ、その作用は貨幣の場合と同様に credit をなした人、

ある。故に crcdit にて物を買た人はその入來れる商品なる資本財の價値を貸方負債勘定にも記入するのであつ こととなるのであつて credit された人即ち信認を受けた人より credit capital が引渡されたことを現はすので

ろの抽象的觀念である。私はこの場合 credit も亦資本財として考慮すべきものであつて、斯る無形財産も亦資 に現はれる債務は他人に Credit Capital を引渡して、これと交換に得たる資本財の價値を示すに過ぎないとこ 斯くの如く解するとすれば借方に現はれる債權は收益力增大の原因であるところの資本を現はすけれども、 tal は他人に對する信認であつて、その有する債權がそれを表示し、その債權の轉々に依て收益力は增大せらる。 て credit なる資本は他人の手に入りたるものといふべきである。されば或人が所有する財産たる Credit Cap-

ど同様のものと解したい。 らずとは考へず、凡ての貨幣は資本であり、又これ等無形財産の資本的性質は大體 Good-Will 及 Patent 等と 本財の内に加ふることに賛成したい。從て金準備が存する丈けの貨幣のみが資本であつて、他の貨幣は資本にあ 以上說きたるところに依て、債權は財産として數へるけれども、負債は抽象的なる資本價値として考へること

新なる資本が發生するものと解することが適切であると思ふ。而して無形資産が財産として取扱はれつゝも、そ 財を獲得することとなり、債權者に對しては、債權が新しき資本的財産として效用を與ふるに至るのであつて、 寧ろ不確定資本(又は信認資本)といふ方が適切である。卽ちこれに依て債務者は自己の信認を元手として、資本 の理由は明かにせられたと思ふ。斯くの如く解釋すれば負債は他人資本といふよりは企業本位の立場より考へて

point de vue juridique et comptable) 乍然 Patent はその本質上 Good-Will 及 Trade Mark 等と同種のも 等を Valeur immobilisée improductive 又は Valeur morale. と稱して Valeur intrinseque を有せず、 の計算の理由として特殊なる解釋を附せらるゝこと、從つて他の一般財産とは別種のものの如く考へられること 増加又は其他の利益増加の原因となるべきものであつて、過去に於ける努力に依て生出せられたる特殊の權利で Patent, Trade Mark 及 Copyright 等をも含ましめて次の如く定義することを得る。「それ は利益獲得、價値 値であつて、 ものは他の財産に比してその價値の維持が多少危險性を帶びて居ることは事實であつて、この點に於ては他の種 のであつて他の有形資本財と同様に生産的であり且つ同様の價値あるものといはなくてはならぬ。勿論これ等の は、法律家及經濟學者の外計理學者に依ても屢ばなされるところであつて、フランスの Folliet は特許權及創業費 ある。」 つまり營業の賣却價値の一要素として考慮せられるところの工場其他の價値に附加せられたる特殊の價 ある。」 而してこの權利が法律上商標權、特許權及著作權等の名に依て保護せられるのであつて Good-Will も の說くところに從へば「グツドウィルとは營業の賣主より買主に授けちれたる、その營業機承者としての特權で ふことは正當でない。然らばこれ等 Good-Will 及 Patent 等の價値成立の基礎は何であらうかといふに Leake の財産とは區別する必要はあるけれども、これを以て直ちに不生産的にして且つ Valeur intrinsique なしとい Valeurs とは全然區別すべきものと主張して居る。(Folliet-Le Bilan dans les 顧客との旣存關係の所有をいふのである。これを更に廣く考へて、單に顧客との關係にのみ限らず Sociétés Anonymes au 從て他

六四一

資本の計理學的觀念

商學研究

第三卷

第二號

計といふが如き漠然たる計算に依てこれを決定することが多い。(Leake—Commercial Good-Will) 益の資本還元に依るべきである。然し斯る計算は頗る困難であるために、通常は過去に於ける利益の數ケ年分合 ある。故にその評價は常然將來に於ける特殊利益の考察に依てなさるべきものであつて、豫想せられたる特殊利 fits)獲得の可能性に依據するものといはなくてはならぬ。而して特殊利益とは明かに Normal Profits を超過す **る利益卽ち通常の經費及通常の經營を以て、他の同一經費及經營の企業以上の利益が獲られる場合の超過利益で** る特別なる利益獲得の基礎となるものであるから、この權利の價值は將來に於ける特殊利益(Extraodinary Pro-**んで居る。右に述べた**如く、 グツドウェルは過去に於ける各種努力の結晶たる特殊の權利であつて、將來に於け 亦とれ等のものと全く同種の性質を有する。故にリークは、これ等總てを合せて Commercial Good Will と呼

等のものは、資本の觀念にあらずして資本價値の觀念であると言て居る。即ちこの價値は孰れかの財貨に附着 るものであつて、その財貨の性質に依て或は資本となり、或は資本とならざるものである。又これ等特殊關係は

建物及機械等の質物財に附着せる價値であつて、斯る有形財の價値をそれ丈け増加するに過ぎないものと

Böhm-Bawerk は明かにこれ等 Good-Will 及 Patent 等の無形財は資本として認めざることを主張し、これ

土地、

說いて居る。(Böhm-Bawerk—Positive Theorie des Kapitales)

ざることは明かであるから、この意味に於ては、これ等のものはその企業形態全體としての結合體の價値を增加す **これ等特殊の權利が企業形態に附隨して初めて存在に導かれるものであつて、それ自身獨立的の存在を保ち得** するが如き資産であり、且つ他の資産の如く貨幣に換ゆることが困難なるものであるから、これを出來得る限り 73 時に經濟界の變調又は臨時特殊なる事件の發生等に依て、一時的に利益消失の悲境に陷る場合があつても、 のは收益皆無の場合であつて、斯る企業については創業費を資本財として考慮すべき根據がない譯である。 企業收益の基礎となるものであるから、これを資本財として看做することは正當の解釋である。たゞ問題となる にして創業費も亦企業設立の際必然的に要すべき種々なる經費である以上は、それは企業成立の條件であり且つ を代表するところのこれ等の關係は、 でないと思ふ。斯くの如く、他の個々の資本財に附着せしむることを得ず、しかもその企業形態全體の價值增加 一時的のものなるときは、その創業費を猶資本財と考へても差支へないと思ふ。けれども經濟界不況の際消失 これを獨立の存在として一の資本財と看做すことは何等差支へない。 それ 同樣

るに過ぎないけれども、これを特に土地、建物又は機械等の或特殊の資本財に附着せるものと考へることは隱當

一 資本の大きさ

早く鎖却して資本財の内に斯る項目を抱含せぬ樣に努むることが健全なる經營政策であることいふ迄もない。

たる二ケの事物にあらざること明かであるけれども、現時の經濟生活に於ては企業に對する價值觀念の客觀性が 法と、資本價値よりする方法の二種が考へられる。前述の如く財産と資本價値とが同一物の兩面であつて、離れ

資本の觀念に二種あることは旣に說きたる如くであつて、その大きさを計量するについても、財産よりする方

盆明白となり、財産を通することなく直接に企業全體としての客観價値が人々に依て常に考察せられる。 の企業財産について評價を下す方法をとらずして、企業なる一組織全體としての價値が抽象的に評量せられ、 即ち個

それに依て企業の資本的價値が算定せられることが頗る多い。もとより理論的に言へばこの兩種の方法に依る結

事實に於て兩者の結果が常に幾分の相違を有する。

果は全然一致すべき筈であつて、複式簿記の原理も亦こゝに根據を有するものといふことが出來るのであるけれ

計理學上貸借對照表價值決定論として盛に議論せられるところはこの點である。斯る評價理論が多くの人々に依 る、考慮し得べき總ての財産を列擧して、その眞價を記載合計することに依てこの目的を達し得る筈であつて、 財産の側よりする企業の資本的大きさを評定することは、言ふ迄もなく財産評價に依 て な さ れ、企業に属す

て説明せられるに當て異れる各種の立場があり、それがためにその決論の一致を見ること難き場合が屢ばある。

何れよりするも結局同一の決論に達すべきことが理想であり又純理より見れば凡て一致すべき筈である。然るに これ等立場の主要なるものは回法律的見地 b經濟學的見地 (c) 計理學的見地 等であつて、これ等各種の見地

濟生活說明の根底として役立つべき筈であるから、營利企業に於ける總ての理論も亦とれと乖離すべき理由は毫 の存在或は發生等よりして法律的見地よりするものと他のものとが相違することが多い。又經濟學の理論は圣經 度制定せられたる法律の解釋については、その文字の意義の點より或は立法者の豫期せざる複雜なる實際關係

も存せない譯である。乍然通常計理學は主として經營政策的見地より理論と實際との折衷點にその根據を求むる

こと多きがために、純理上正當なる ことも實際上その儘行ひ難き事情があつて、兩者の理論は常に一致すると

は言ひ難い。

Osbahr はその評價理論を次の如く大別して居る(Osbahr—Die Bilanz vom Standpunkt der Unterneh-

mung. 2 te. Afl. S. 23)

(1)護渡價值

(a) 客觀的讓渡價値(取引所叉は市價價值)

(b)主觀的讓渡價值(個人的叉は營業的賣申賈直)

(2)使用價値又は經營價値

③原價(又は取得)價值 b製造原價 (a)買入原價

4)收益價值

(a)企業收益價值(營業讓渡價值)

b)各個財産の收益價値

こゝに示されたる如く、貸借對照表價值決定には各種の理論があるげれども先づ第一に重要なる點は客觀的價 資本の計理學的概念

一斉學の

商學研究

第三卷

に二重に主觀的なる現象である。吾々の認識する事物に對する二重の認識があつて初めて生ずべき現 觀を離れて價値は存在せぬ譯であつて事物の存在を知ることも旣に人間の主觀であるが、 物の價値とはその事物の上に投ぜられたる人間心理の光明が照出するところの色彩に外ならないから 發達と共に主觀說が非常に有力となり、 物が在ることと、更にその物の値打を認めることとの二ツの主觀作用が必要であり、吾々の主觀が物の上 人間心理の反映したるもの卽ち價値であつて、Gide 更に價値現象はその上 の言へるが如く事 象であ 人 間 Ø

ふ。然し斯る價値判斷が吾々個人の個々の價値判斷にのみ限られ、一社會共通の價値判斷を考慮せぬとすればそ ならない。 と説明せられることが一般に用ひられる通説であつて、その解釋の仕方に依ては誤りなきも と思 再度働きかけて、その作用に依て初めて價値が認識されるのであるから、

當然價値は主觀的のもので

な

ζ

て

は

っ

K

主

れは大なる誤謬である,吾々が机の價値を考へるとき、吾々はその机の用途、及その與ふる便宜、等について

斷するのではなくして、吾々が住む社會が前以て同樣の机に對して五十圓と評價するが故にそれを思合はして、 にこの机は五十圓の價値ありといふとき、吾々自らにとつて、それが與へる便利の程度を一々考へて五十圓也と判 て何程に賣買されてるか、その値段が如何程であるか、といふ如く、旣に決つて居る値打を考へることが多い。 かに一々考察することは殆んどないと言て好い。通常吾々が机の價値を考へるときは、 その机が吾 ロ々の社会 一會に於

故

から、 判斷が存在し、吾々の個々の價値判斷は、これを社會より學ぶのであると解するのが正當である。勿論その學び 勝手に斯る判斷をなす譯ではなくして吾々の社會共通の判斷が旣にさう決定して居てそれを吾々に教へて吳れる この机も五十圓が相當であると判斷するのが通常である。又金は鐵よりも價値が多いといふことは決して吾々が き場合でないから差措くとして、とにかく吾々個々の特殊なる價値判斷を別として、更に一の社會に共通の價値 それに習ふのに過ぎない。 勿論
これ等の
點については複雑した議論があるけれども、
それは
こゝで
説くべ

學の對象となり得ない筈であつて、科學としての經濟學の對象となるべき價値は固定性ある、且つ容易に捕捉し得 ずること疑ひもない。然し經濟學の對象となるべき價値は人に依て異り、各個人についても朝と夕と又熟睡 方は人に依て異りそれぐ〜特殊なる印象を刻銘することは事實であつて、これに依て個人的價值判斷の相異が生 とと不眠のあととに依て常に變動するが如き不確定なるものであつてはならない。斯るものは科學としての經濟 のあ

如くであるけれども、此の場合客觀的實在である事物といふ意味を佛蘭西經濟者 Simiand 從で客觀的實在性を有するものといふことが出來る。元來主觀的なる價値を客觀的實在と考へることは不合理の の言た様に『吾々の

的價値とは別物であつて、個人的價値を以て主觀的のものとすれば客觀的の價値といふことを得るものであり、

て共通に存する比較的固定性ある價値である。斯くの如き意味に於ける價値は全然個々の人々の主觀に基く任意 る如きものでなくてはならない。卽ち經濟現象としての價值現象はその經濟現象が說明さるべき一社會の內に於

個人的自然性に抵抗するもの」即ち限界と分離とを以て吾々に對するものは凡て客觀的實在たる事物であると考 資本の計理學的概念

商學研究 第三卷 第二號

る」といふ Bougle の主張は正しい。故にこゝに說きたる如き意味に於ては經濟學上の價値は客觀的實在であつ て、賃借對照表に掲げらるべき價値も亦この意味に於ては客觀的でなくてはならない。獨逸の れば、感覺について、ミルの說いたところはまた滿足についても眞理であって「價値は滿足の永久的可能性であ ふれば差支へなき譯である。又Millの說くところに從つて「事物の實在は感覺の永久的可能性より成る」ものとす Simon(Bilanzen

る der Aktiengesellschaften 3 tc, Aufl.)の如く貸借對照表價值は凡て主觀的ならざるべからず、從て個人的使用價 考慮して評價をすべしといふにあるが如くであつて、全然個人的自由評價を許さゞることは明言するところであ 値ならざるべからずと主張することは、その言葉を嚴格に解釋すれは正當でない。乍然個人的使用價値を主張す Simon の真意も亦必ずしも個人の任意的評價を意味するものにあらずして、その歸屬者の個人的狀況を十分

る

る。 る。 營業繼續中の企業の貸借對照表價値を譲渡價値に依て決定すべしといふときこれを企業全體の賣却價値と考 故に兩者は明かに區別することを要するのであつて、こゝでは主として營業繼續中の場合について說明をす

り考慮すべきであつて、清算の場合に於ける讓渡價値は營業繼續中のそれとは異るべきことは容易に 考 へ ら れ

Osbahr の掲げたる第一の譲渡價値はこれを二ツの場合に分ち(3)清算の場合

(b)營業繼續の場合、の二方面よ

慮すれば、その企業が他人に依て何程に買取らるゝやの問題であつて、客觀的時價に依て決せんとする方法であ る、然るにオスバールがこれを客觀的讓渡價値と主觀的讓渡價値とに分ちたるは了解に苦しむところであつて、

ある。 財産についても文字通りあてはむることを得て、設備財産についても現在これを造つたら何程の價値を要するか 所有商品及製造品等についてであつて、これ等についてはその當時の市價が賣渡價値に文字通りあてはまる譯で 常に客觀的なるべきものと思はれる。而して讓渡價値なる名稱が眞にあてはまる場合は營業繼續中とすればその といふことが考へられる。而して斯る使用價値又は經營價値と雖も凡て客觀的評價なることを要するものである は第一の讓渡價値と異らないものと考へられる。たゞその名稱上讓渡價値よりは主觀的意義を多く抱含し、設備 讓渡價値はこれを企業全體として考慮する場合であつても、その所有財産個々に就いて考慮する場合であつても この主義を徹底せしむれば結局第一と同様その財産を時價に依て評價すべしといふこととなる。第三に於 第二の使用價値叉は經營價値なるものは結局使用財産の營業的價値といふことであつて、その根底に於て

造價値に依るべしといふにある。第四の收益價値は企業の收益力を基礎として測定せられる價値であつて、結局 から、 張であつて現在相場主義といふことが出來る。 に於ては營業的讓渡價値と一致すべきものと思ふ。故にこの理論も亦根底に於ては第一及第二の中に入るべき主 た當時の價値を貸借對照表の價値とすべしといふ說であつて、買入れたる財産は買入價値又製造したるものは製 ける取得價値(狹義の原價價値)は第一及第二とは全然異れる主義に據るものであつて、時價に關係なく、 以上說明したる各種の理論を一括して大別すれば結局計理學上常に議論せられるところの二つの主義卽ち⑴現

資本の計理學的觀念

價主義と②原價主義とに分つことを得る。現價主義は通常設備財産については現在の買入相場、其他の財産につ

六四九

六五〇

第三卷 第二號

實現せらるべきことを豫期するところの增價とを混同する危険を避けんとするにある。卽ち斯る混同に依て實現 學者等に依て承認せられるところであるが、原價を最高限とする理由は、旣に實現せられたる增價と將來に於て に原價主義の内に於て、原價を最高限度として、それ以上の評價を許すべからずといふ主張は廣く法律家及計理 的評價に依る不正確及不正等が導かれ或は價值の絕間なき變動性に依て企業の安定を缺く恐れあるとである。次 公定相場なき財産についての價値決定及時價の變動性に依る評價の不安定等に關する問題であつで、
 の現況に依て適宜決定すべしといふこととなる。この說は理論に於て撤底して居るけれども實際上困難なる點は に依て評價すべく、その原取得價値の如何に拘らず、公定相場あるものはそれに依り、 又公定相場なきものは市場 いてはその賣却相場を意味するものと解すべきである。 即ちこの主義に依れば財産は貸借對照表作製當時の相場 時 ĸ

任 意

論者をして言はしむれば原價主義と雖もその主張者の言ふが如く科學的にして任意的要素を含まずとは考へられ

らである。且つ又原價が現價に相當することは極めて稀れであつて現價は常に高低して居るに拘らす財産の價值 ない。何となればこの原價を構成する要素の内には全く推算に依てのみ計算し得べき要素を尠からず抱含するか 素は原價の外には存せないから、これに據るとは最も科學的であつて他の方法の如き任意的要素を混入すること あるに依るのである。との主義を辯護する理論として重要なる點は評價に當つて最も確實なる基礎となるべき要 せられたる事實と、單なる豫想に基く事實とを同一視する結果評價の安定を缺き從つてたと配當がなされる恐れ

この主張には有力なる理由の存することは勿論であるけれども又一方反對

なき長所を有するといふことにある。

れを評價の上に少しも考慮せぬこととなるが故に同様の非難が加へられる。(Delavelle—Le Bilan au point de くてはならぬ。大多數の原價主義者即ち原價最高限論者の主張に依ても現價が原價以上に上りたる場合には、こ を常に原價を以て評價することは企業財産の實際狀態を表示べすき貸借對照表作製の趣旨に反するものと言はな

vue comptable et juridique section V.)

幣或は貨幣と同類のものの如く、正確にその價値が勘定せられ、しかもその價値の變動が比較的微少なるものにつ る現價」が知り得るものと假定すれば貸借對照表價値はこれに依るべきものといふ點に就ては疑ひない。即ち貨 いては現價主義を採ることが少しも差支へなく、それが最も適切なる方法といふべきである。實現せられたる利

評價に關しては猶多くの議論がなされるけれども要するに純理論としては、若しも「正確にして且つ確立した

幣と雖もその價値が確定し難きことあるは現時の獨逸にその最も著しき實例を見る。斯る場合に於ては自國貨幣 價値の決定は困難ではあるけれども常にそれが不可能であるとはいはれないのであつてその增價についても例ば に依て正確且つ確立せる財産價値を評價し得ざること勿論である。) 貨幣以外の財産について正確且つ確定せる 且つ正確なる現價なるものは貨幣以外のもの につい てはこれを求むること極めて困難である。(例外として 貨 の場合には增價が未だ實現せられないものとすることは右の理由より言はれることである。然るにこの確立せる を有せない。卽ち貨幣或は貨幣同類のものに變化したるとき、增價が完全に實現せられたるものと考へ、その他

益とか、實現せられぬ利益とか、いふことは結局斯る正確及確立といふことを根據としていふ外には何等の意味

六五二

都會の中心にある土地の如きは大體に於て年々增價を見ることが確實であり、その現價は正確且つ確立せるもの

府學研究:第三卷

第二號

の策を採ることに意見一致せるものといふなとが出來る。(固定資産については適當の減價を計算したる ものを 何れも折衷主義に依て狹き意味に於ける原價主義即ち原價を最高限として、それ以内にて現價に依るといふ萬全 のであるし、又この方法が惡意に利用せられ易き事情もをつて、一般に各國に於て法律家、計理學者及實務家等 を立證して居る。)一般的に言へは斯くの如き現價は單に理想的觀念であつて實際には算定し難き事情にあるも と計算せられ得る場合がある。(今回の大震災に件 ふ 東京中心地價の戀動はこれについても危険、 困難なること

の賃汚項目として列擧せられるものは大別して、自己資本(資本金勘定及剩餘金勘定)と他人資本(負債勘定)とで る。それが一企業の賃借對照表貸方側合計に依て表示せられるものなることは旣に說明せるところであつて、こ 以上は財産の側より計量したる資本の大きさであるが、次に資本價値の側よりするその算定について説明をす

以て現價と考へること一般である。)

等とも假りに呼ばるべき觀念が考へられる。卽ち右の限定資本價値の外に資本金勘定と剩餘金勘定とを合せたる 差引たる價値であつてこれを假りに限定資本價値と呼べば、この外に總資本價値、確定資本價値及不確定資本價值 ある。而して簿記に於て資本金勘定として現はさるゝものはいふ迄もなく企業の總價値より他人資本及剩餘金を

せられる譯であつて、吾々が抽象的意義に於て資本といふとき、この内何れかを指すものである。而して所謂限定 確定資本價值、 負債勘定に依て示される不確定資本價値及これ等總てを合せたる總資本價値の四種の觀念が分類 稱するものはこの帳簿上の資本金勘定と現在に於ける眞の限定資本價値とに明かなる相違ある場合であつて、種 下にあつて、その企業價値が恰度一株につき九十圓の價値を有することを意味する。通常 百圓の株券が應募者にとつて九十圓の價値を有するに過ぎざることは、その企業の資産狀態及收益狀態が平準以 圓支拂て百圓の株券を受取るのであるから應募者にとつてそれは九十圓の價値あるものに過ぎない。 便宜のためになす取扱と言はなければならない。會社が株式を割引發行する場合を考へて見れば、應募者は九十 然し純理論の上から見れば實際拂込れたる金額が限定資本價値であつて會社帳簿上の拂込資本額は計算の整理上 失勘定又は繰延勘定に記入し、打步發行のときはそれを利益勘定又は積立金勘定に記入することが通常である。 業創立の際定められたる資本額であつて、後者は實際拂込れたる金額を指すものであるが、こゝに注意すべきこと 十萬圓である。斯る場合に於ては會社の帳簿面にては拂込資本金百萬圓として、割引發行のときはその差額を損 にて株式發行をなしたるとき、即ち額面百圓の株券を百十圓にて賣出したりとすれば、實際拂込れたる資本額は百 面にては拂込資本額は百萬圓であつても實際拂込を受けたる部分は九十萬圓である。又これと反對に會社が打步 ふ點であつて、例へば資本金百萬圓と定めて一株百圓の株券一萬枚を九十圓にて賣出したりとすれば會社の帳簿 は實際拂込れたる金額といふとき、それが割引又は打步の株式發行に依て拂込がなされた場合何れを指すやとい Stock Watering 斯くの如く

資本價値には更に二種の觀念があつて、公稱資本額及拂込資本額(實際拂込れたる金額)の二種がある。前者は企

々なる不正手段がこれがために講ぜられる。又資本配當と呼ぼるゝ事實も一種の

Stock Watering であつて、

第二號

商學研究

第三卷

ることを常とする。フィツシャーが Nature of Capital and Income の中に掲げたる質例をとつて見れば、米 せられしものと、市場に於ける株券價格の合計とである。この兩者は純理上一致すべき筈であるに拘らず相違す に基く事實である。確定資本價値についても同じく二ケの觀念が考慮せられるのであつて、卽ち會社帳簿に記載 配當に因る限定資本價値の減少を明示せす從つて帳簿上の資本金勘定と限定資本價値との相違をその儘放置する

五十九仙の値打を有せなくてはならない。換言すれば額面百弗の同行株券は各四百三十二弗の相場を有すべき筈

國紐育銀行に於ける資本金勘定剩餘金勘定及未辨利益勘定等の合計が百二十九萬五千九百五十二弗五十九仙であ

つ、てその限定資本價値が三十萬弗であつた場合、理論上は株券三十萬弗が事實上百二十九萬五千九百五十二弗

基くのであつて、その主觀的評價が市場評價と異れるに依るか或は記帳の煩雜を避くるがためか、又は經營上の 皆無と言て好い。これは企業經營者が種々なる理由より、その企業を市場價格と一致する如き評價をなさゞるに であるが、實際その賣相場が七百弗であつた。斯る相違は常に見るところであつて兩者が一致することは殆んど

拂利益等を有したりと想像すれば、その新株券の發行に伴ふ價値上の變化は次の如く示される。 安固を圖らんとして故意になされたる評價が市場價格と相違するために起るものである。而して今或期間營業を なしたる後會社が新株券の募集をなすことを假定し、この場合右に說きたる如く限定資本價値の外に剩餘金及未

有すると同數の株式が舊株主に依て買取られたりと假定すれば、 資本增加前の勘定が右の如くであつたとして、新株券十萬圓が株主に額面額にて賣出されたりとし、その現に 雜財產勘定 雜財產勘定 # **40,**000 # **4**0,000 30,000 資本金 剩餘金及未拂利益 100,000 資本金 証 債 剩餘金及未拂利益 100,000 頭 # 100,000 **# 400,000** # 100,000 # 100,000 200,000 100,000

萬圓であると假定して、財産が三十萬圓より四十萬圓に變化したりと假想する。斯る場合に於て若しも帳簿上の しこの場合如何なる形式にそれが變化するとしても、その價値が全然買入原價と同一であること、即ちそれが十

六五五

資本の計理學的觀念

となるべく、この増加したる資本財は通常最初は現金の形をとるけれども、次で工場、機械等に變化する。然

然るに新株券は一株百圓にて發行せられたるものと假定したるが故に、舊株主はこの新株券を賣るとすれば百圓 確定資本價値が正確に現價を示して居て市場價格と一致せるものとすれば、 にて買ひたるものを百五十圓に賣ることを得る 譯 で あ る。卽ち彼等の應募權は一株五十圓の値打ある譯であつ 券は三十萬圓の確定資本價値を代表することとなつて、額面百圓の株券が百五十圓の價値を代表する筈である。 新株券の發行後に於て二十萬圓の株

枚を所有したる株主はその價値が二千圓より千五百圓に下落することに依て五百圓を失ふけれどもこの五百圓は 五十圓が恰度應募權の價値に依て代表せられたる超過價格五十圓に依て正確に相殺せられるのである。舊株券十 代表して居た。卽ち新株祭發行前には一株二百圓であつた筈であるから、株主が舊株祭價格に於て失ふところの

て、この應募權は價値計算上當然に發生すべき事實である。

而して舊株券+萬圓は旣に確定資本價值二十萬圓を

つて、 する。 斯る理由より、 この損失を補ふ唯一の手段は新株に態募するか又はその態募權を賣却するか、孰れかに依る外ないのであ 新株券は上例の如き場合には舊株主にのみ市場價格以下にて提供せられることが公平であ

の應募權を賣却せざるときは自己の損害を招くととなるのであつて、舊株券の價格はこの新發行に依て當然低下 株券を干圓にて取得するために五百圓をこの權利に對して支拂ふのである.舊株主は斯る場合應募を怠り又はこ 彼が新に得べき新株券十枚に對する應募權の價値と全然同額である。故に舊株主外の人々は千五百圓の價値ある

然し右の如く新株應募權の價値と舊株券の減價との間には正確に補償が一致することは事實上極めて稀であ 何となれば會社が新株金を非常に有利に投資し得べき好機會を有する場合にのみ斯る募集がなされることが

に於ては舊株券の價格はその低下を見ること極めて僅少なるか、又は皆無なることが見られる。(Irving Fisher 通常であつて原價以上の値打ある資本財の買入をなし得べき有利なる地位にあること多きが故である。この場合

けは他人の權利に屬すべき價値卽ち他人の意思に依て除去せらるべき價値であつて企業の立場から見て不確定な 不確定なりやといふに、企業の資本價値を表示する點に於ては、資本金勘定と同様であるけれとも、この部分丈 -Nature of eapital and Income, P. 68-) **鼓に假りに不確定資本價値と名づけたるものは負債勘定を資本的觀念に依て表はしたるものであつて、** 何故に

る資本價値なるが故である。

卽ち企業の資本價値中自己の自由處分に屬せざる部分を稱するものであつて、

して説明せられる。又負債と資本金とはその起因を異し、且つ企業に對する法律關係を異するものであるから、 は資本金勘定と全然分離して、負債勘定は消極財産であるから抽象的觀念なる資本金勘定とは全く別種の觀念と 目が含れて居て、この期限の長短に依てその資本價値としての性質が多少宛異る。通常計理學に於ては負債勘定 に負債勘定といふ中には極めて長期の社債の如きものより、極めて短期の支拂手形及賣掛金等に至る迄各種の項 經營者より見て固定性少く、不確定なる狀態にあるからこれを假りに不確定資本價値と名づけたのである。 ---

b であると言て差支へないと思ふ。負債と資本との分離を主張する人々も長期の社債及借入金等については、これ この兩者を同一視するのは誤りであると說かれる。斯る分離說にも相當の理由が存することは勿論であるけれど 吾々現在の立場、即ち企業經營論の立場より見れば何れも企業價値の一部を形成するといふ點に於ては同一

資本の計理學的觀念

六五八

消極財産として考へるよりは寧しろ借入資本金なる名稱を以てする

資本的價値としては通常市場價格の方が比較的正確に近きものと言ひ得る。社債は株券と異て元金の償還がなさ れることは明かであつて、企業成績不良なる會社の社債は決して額面價格丈けの價値を有するものではない。故 比して遙に强力であつて、その變動は極めて少い。然乍社債券と雖も企業成績及企業財産の狀況に依て影響せら るけれども社債價格に對してはその影響が左程に鋭敏にあらず價値の大きさの固定性より見れば社債券は株券に に額面價格卽ち帳簿上の社債價格と市場に於ける價格とは常に或程度のヒラキを示すことが通常であつて企業の ふとが出來る。乍然株券と社債券とはその法律的關係が異ることは勿論であるから從てその價値の決定及變動に ろは、實は確定性の程度であつて、 根本に於ては相異するところなく、何れも企業の資本價値を表示するものとい に對する資本價値の確定性の程度に依て一を資本と考へ他を負債と考へる見方である。 のよりは確定性非常に少く從てその資本的性質がそれ丈け少きものと一般に考へられるのであつて、これは企業 見地より見れば單に確定性又は固定性の大小相違に過きないものと思はれる。即ち極めて短期の債務は長期のも ことを適當と考へることが多い。(Folliet—Le Bilan)この點より考ふれば負債と資本金との相違は資本價値的 同様の事情の存せざることは明かである。企業成績の直接的影響は直ちに株券價格に及ぼすものであ 故にこの兩者の異るとこ

れることとなり、不確定資本價値は減少して確定資本價値がこれを補充する、不確定資本價値はその名の示す如く れることが通常であつて、この償還は普通利益金の内より支拂はれ、これに依て負債勘定は資本勘定に變更せら

定化することが通常の場合適切なりと説明せられる。何となればこの不確定資本價値を單に消滅せしむるときは せる社債額が表示せられる。同じく償還と言つても社債償還と減價銷却とは全然その性質を異にし、從て資本價 と言はなくてはならぬ。而して社債は償還せられるに從て、貸借對照表には各年度末に於て猶未償還として殘存 これがために必要なる運轉資金を失ふこととなつて企業經營上の困難を惹起すること多きに依る。卽ち元來不足 不確定であるから結局は消滅するか、或は確定化せられるかの運命にあるのであつて社債の如き負債はこれを確 したる資金を獲んとして設けたる不確定資本價値は特別の事情の存せぬ限りこれを減少することは不合理である

(Folliet の例に傚ふ)

値に對する關係についても同様でない。例ば

社債償還前の貸借對照表

| | | | 運轉財產 | 固定財產 |
|--------------------|--------|---------|----------------|-------------------|
| #360 ,00 0 | | | 220,000 | # 140,000 |
| | 些 | 器 | Ë | 茶 |
| | 绡 | 债務: | 偣 | 金 |
| # 3 6 0,000 | 20,000 | 190,000 | 50,0 20 | # 100, 000 |

資本の計理學的觀念

この利益金二萬圓より社債の償還がなされたりとすれば、

六五九

計信償環後の貸借對照表

| | | | 運轉財產 | 固定財產 | |
|-------------------|---------|--------|---------|------------------|--|
| # 340, 000 | | | 200,000 | # 140,000 | 1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1. |
| | 諸 | 償還 | 莊 | 茶 | 民间對照 |
| | 債務 | 質還齊社債 | 氟 | 余 | Ж |
| # 340,000 | 190,000 | 20,000 | 30,000 | y 100,000 | |

値に依て代入せられたりと見ることが出來る。然るに減價銷却の場合に於ては、 減價銷却前の貸借對照表

確定資本價値は同額であつて、何れにしても十二萬圓である。而して結果に於ては不確定資本價値が確定資本價 となつて、運轉財産二十二萬圓の中二萬圓を減少して居るけれども、株主の權利に屬すべき企業の純價値即ち

| | | | 運轉財產 | 固定財產 | |
|------------------|--------|-----------|-----------|-------------------|---------|
| # 360,0≎0 | | | # 220,000 | # 140, 000 | 2787787 |
| | 坐 | 翠 | 計 | 茶 | |
| | 绡 | 債務 | 貢 | 愈 | |
| # 360.000 | 20,000 | 务 190,000 | 貴 50,000 | ¥ 100,000 | |

減價銷却後の貸借對照表

となり減價銷却の場合には運轉財産は同額に存するけれども、株主の權利に屬すべき確定資本價値は二萬圓減 固定財産 **₩** 360,000 **# 140,000** 220,000 恒 茶 點 減價銷却準備金 軍 赘 (H) 寅 **#** 100,000 **#** 360,000 190,000 20,000 50,000

違する理由は極めて簡單であつて、前者は負債の支拂であるに反して、後者は損失の塡補であるからである。 資本價值は變化せす、減價銷却の場合には運轉財産は變化せないけれども確定資本價値の減少が生する。この相 少して十萬圓となる。即ち社債償還の場合には、運轉財産の減少と不確定資本價値の減少を見るけれども、 確定

は決して帳簿面の價格にあらずして發行價格なること明かであつて、純理論的に言へば、社債の價値は償還期限 而して社債が割引に依て發行せられることは屢ば見るところであるが斯る場合に於て不確定資本價値の大きさ

と不確定資本價値との合計に相當すべきものであつて、これに依て計量せられる譯であるが、企業經營狀態のバ 最後に吾々は企業全體としての價値即ち總資本價値の問題に觸れる。これは言ふ迄もなく前述の確定資木價値

資本の計理學的觀念

に於ける社債額面價格の年金法に依る現價であるといふことを得る。

言て好い。 **券市價の如く密接なることを得ないものであつて、從つて企業狀態のバロメーターとしては適切なるものではな** に企業價値の變動が表示せられる。社債券の市價も亦企業狀態の影響を受くること勿論なれども、 12 メーターとも稱すべきものは、 故に企業全體としての價值變動の狀況もその株券市價の變動に依て比較的正確且つ明瞭に考察し得るものと 而して市場に於ける株券價格の決定は主として企業の收益力に基いて判斷せられるものとなされ、 その確定資本價値であり、從つて市場に於ける株券價格の變動に依て最も明か その關係は株

過

論的に説かるゝ收益能力の測定も、その測定要素の完全なる把握は企業内部の人々にとつても困難であつて、況 なる事情に依て決定せられるものにあらずして極めて複雑にして且つ多様なる要素の影響に左右せられる。 れたる資本價値は最も正確且つ完全なるものであるべき筈であるが有價證券市場の狀況は決して斯くの如く明確 叉理

と說かれることが通常である。若しこの理論が正確に實際上適用せられるものとすれば、市場價格より計算せら 去に於ける收益力の觀察に依て將來に於ける收益の豫想をなし、これに基いてその市場價格が決定せられるもの

んや外部の人々にとつては到底十分にこれを知ることは不可能である。殊に現時の如き金融市場組織の下に於て 企業經營者自ら故意に收益力の實狀を隱蔽して、これを私慾のために利用せんとすること容易であり 且つ

事實上斯る質例も尠からず存する狀況の下にあつては、

收益力に依る測定も一般に考へらるゝ如く正確なること

n を得ない。殊に株式會社の如き近世大企業組織の發達と共に、企業所有者とその經營者との分離が益完全に行は その兩者の利害必ずしも常に一致せざる狀態の下に於ては、直接經營に與る人々は、その企業の完全なる發

に依て漢大なる利益を占めんとするとに重きを置き、從つて資本市場の操縱のために全力を傾倒するがき實例が 達、生産工程の改善及製造品の改良等に依て利益を獲得せんと努力することの代りに、單に資本市場に於ける活躍

が極めて重要なるものとなるに至たのであつて斯る狀況の下に於ては企業そのそのものの收益力よりは經營者の も、資本市場に於ける利益のために狂奔することが多くなつた。卽ち資本證券の賣買に依て利益せんとする活動 金融家となつて、眞の經營活動の外に,資本市場の敏腕家として、時としては企業そのものの利益を犠牲にして 屢ば見られるに至つた。卽ち有價證券市場の發達及取引所の發展等に伴ふて大企業經營者は又他方に於て大企業

が左右せらるゝことが多く見らるゝに至たのである。斯くの如く市場價格を基礎とする資本價値の決定も極めて 論とは逆に資本の價値が先づ金融市場に於て決定せられて後初めて財産の評價がなされ且つそれに依て財産評價

故に近世大企業組織の下に於ては、從來說かるゝ如く財産の評價に依て資本の大きさが決定せられるとする理

めらるゝことは當然の結果である。(Veblen-The theory of business enterprise, chap. VI.)

金融市場操縦の手腕に依てその株券市價が左右せられ、從つてその企業の資本價値がまたそれに應じて動揺せし

觀念が常に一致を見ること難きは當然のことであつて、たとへ凡ての考慮し得べきあらゆる財産が評價合計せら 曖昧不確實にして且つ變動常なきことは事實であつて、その計算の基礎極めて不安定なることは認めざるを得な いふことを得べく、其他に據るべき明確なる標準を有せない。されば斯る不確定なる測定に基く資本價値の各種 いけれども、 取引所の公定相場ある證券に就て言へば大體に於てそれが企業の資本價值決定の基礎となるものと

當の評價を下すこと困難なりとすれは、比較的正確に近き資本價值の測定は矢張り金融市場よりする有價證券價 * ブレンの說くところに依て明かである。(Veilen-Ibid.) しかもこれ等有形及無形總ての財産を列撃し盡して適 はこれ等漠然として捕捉し難き Solvency 及 Good-Will 等が企業資本の大小を決定する場合頗る多きことはヴ ること極めて困難であつてその眞價は到底測定し得ざるものと言ふべきである。しかも近世信用組織の下に於て Good-Will の如き漠然たるものをも考慮することを要し、經營者の金融的能力及 Good-Will 等はこれを評價す れたりとするも市場價格よりする資本價値と一致し得ざるは當然のことである。況んや財産列擧に當ては廣義の

することなきに至た會社も非常に多數であらうと思はれるが、その株券市價は猶適當の値打を保ち、又一朝 にして全く所謂無産者に伍した個人の多數もその營業復活の望み明かなることは、こゝに述べたる無形財産 社及個人の數は限りなき多數に上るであらう。これがために自己資本に相當すべき目に見ゆる何物をも所有 立證するものである。震災の歳大正十二、十、三十一) の存するに依ることであつて、眼に見えぬ且つ震火にも侵さるゝ事なき、最ぁ貴き財産の別に存することを (九月一日未曾有の大天災に襲はれし帝都の内には、その所有する悉くの形ある財産を烏有に歸せしめた會 格の決定に依ることであらう。

瀬莊太郎

高